

緑なる記憶をめぐる

篠田 昭夫

[]

1847年の3月か4月のある日、ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)は友人であるとともに相談相手でもあったフォースター(John Forster, 1812-76)から、彼の父ジョン・ディケンズ(John Dickens, 1785-1851)の知り合いで同年輩であり、勤めも同じサマセットハウスの経理局で事務官をやっていたディルク(Charles Wentworth Dilke, 1789-1864)と、ストランドの近くの店で働いていた当時会ったことがあるかという質問を受けた。触れられたくない過去に思いがけず触れられて衝撃を受けた様子で、ディケンズはしばし無言であった。その時はそれだけのことであったが、数週間後フォースターが知らずに触れたおのが過去について、ディケンズは詳しく説明してくれたという。ディケンズ没後 1872年から74年にかけて執筆し出版した伝記の中で、フォースターはこの時のディケンズの言動を次のように認めている。

... Dickens made further allusion to my thus having struck unconsciously upon a time of which he never could lose the remembrance while he remembered anything, and the recollection of which, at intervals, haunted him and made him miserable, even to that hour¹⁾.

記憶が続く限りは忘却することはあり得ないし、時折取り付いては惨めな想いを抱かせる幼時の思い出を語ってくれたというのである。このときに聞いた話しやその後ディケンズから書き送られてきた自伝的手記(the fragment of the autobiography)²⁾により、妻キャサリン(Catherine Dickens, 1815-79)にさえ洩らされることの無かった秘密の全てが、フォースターに打ち明けられることとなったのであった。

フォースターにより紹介されている自伝的手記によると、ストランドのハンガーフォード・ステアズにあったウォレン靴墨工場(Warren's blacking-warehouse)に親戚のジェイムズ・ラマー(James Lamert)が総支配人をしていた関係もあって、ディケンズは勤めに出ることになったが、両親は大満足であったという。

It is wonderful to me how I could have been so easily cast away at such an age. It is wonderful to me that, even after my descent into the poor little drudge I had been since we

came to London, no one had compassion enough on me a child of singular abilities: quick, eager, delicate, and soon hurt, bodily or mentally to suggest that something might have been spared, as certainly it might have been, to place me at any common school³⁾.

これが出来したのは 1824 年 2 月、12 歳の誕生日の直後のことであった。続いて父ジョンが債務不履行のため債権者ジェイムズ・カー (James Karr) が起こした訴訟により、マーシャルシー負債者監獄 (the Marshalsea Prison) に収監され、3 月末頃には生活の基盤が崩壊して全く立ち行かなくなった母エリザベス (Elizabeth Dickens, 1789-1863) が家を畳むとともに、弟妹達を連れて獄舎内の夫と合流する仕儀に至ってしまった。長男であり靴墨工場の勤めを持たされていたディケンズは独り娑婆に残され、最初は両親の知人であるカムデン・タウンのリトル・カレッジ・ストリートにあったロイランス夫人 (Mrs. Roylance) の家に下宿したが、わびしさに耐えかねて父親に涙ながらの抗議をした結果、マーシャルシー監獄の近くのサザックのラント・ストリーの屋根裏部屋を借りることができて、朝食と夕食を獄内とはいえ両親と一緒に食べることができるようになったのであった。とはいえ、部屋代は父親が払っていたとしても、週給 7 シリングの収入をやり繰りして 12 歳の子供が糊口をしのぐという基本形態そのものには何の変化も無かった訳であり、両親と弟妹達はまだ引き続き支給されていた父親の給料で、獄外ではここ何年間も経験できなかった程のなに不自由ない安楽な生活を、獄舎内で行動の自由が許されていないとはいえ、ディケンズの眼前で展開していたのである。

そして、「請願書の提出により、債権者との間に示談が成立し、支払い不能債務者法の適用を受けるのに成功した」⁴⁾父親が 5 月 28 日に出獄することとなる。マーシャルシーを出獄した一家はディケンズも含めてロイランス夫人の所へ仮寓した後、ソマーズ・タウンに小さな家を借りる。だが、靴墨工場から足を洗う許しは一向に出ないまま、今はコヴェント・ガーデンのチャンドス・ストリートに移転していたウォレン靴墨工場へ毎日通うという日常は、ディケンズにとって何ら変化を見せていなかった。そうしたある日、息子を外からまる見えの状態で見ながら窓際で仕事をさせていることをめぐって父親とジェイムズ・ラマーととの間で激しい争いが起こり、やっとディケンズは 5 ヶ月間続いた工場の苦役から解放されて、ウェリントン・ハウス・アカデミーなる私塾学校へ通学できることとなる。さりながら、工場にはもう戻さず学校へ行かせると言い張る夫に対して、母エリザベスが反対して息子の工場への復職を主張する成り行きが現出する。

I do not write resentfully or angrily: for I know how all these things have worked together to

make me what I am: but I never afterwards forgot, I never shall forget, I never can forget, that my mother was warm for my being sent back⁵⁾.

借金癖が生活崩壊と屈辱的体験の全ての元凶である父ジョンに対して“his kind nature”⁶⁾とその人柄の良さを認める記述をしていることと対比させると、当てにならない夫を抱えているエリザベスとしては無理からぬ行動ではあるけれども、ここで表白されている母親への怨念と遺恨の激しさと強さには戦慄を催すばかりである。無論これは程度の問題に過ぎず、母親に向かう情念程ではないとしても、父ジョンに対する断絶感や不信感も払拭することなど不可能としか形容の仕様がないくらい重苦しく深いものであったことは指摘するまでもあるまい。

この当時のおのが状態をディケンズは次のごとく回顧している。

I know that I have lounged about the streets, insufficiently and unsatisfactorily fed. I know that, but for the mercy of God, I might easily have been, for any care that was taken for me, a little robber or a little vagabond⁷⁾.

即ち、殆ど誰からも構ってもらえず相手にもされない状況で、私がチンピラや浮浪児に墮さなかったのは奇跡としかいいようがないと。

[]

「チンピラや浮浪児になっていたとしても何の不思議もない」という12歳当時のおのが状況を回顧して自伝的手記の中でディケンズが認めた記述は、*A Christmas Carol*(1843)を皮切りとして、*The Chimes*(1844)、*The Cricket on the Hearth*(1845)、*The Battle of Life*(1846)と続くクリスマス物の作品群の系譜の中で、1848年12月19日に5番目のクリスマス作品として書き下ろし出版された *The Haunted Man*⁸⁾に登場する幼い浮浪児に色濃く投影されることとなる。

A bundle of tatters, held together by a hand, in size and form almost an infant's, but, in its greedy, desperate little clutch, a bad old man's. A face rounded and smoothed by some half-dozen years, but pinched and twisted by the experiences of a life. Bright eyes, but not youthful. Naked feet, beautiful in their childish delicacy, ugly in the blood and dirt that cracked upon them. A baby savage, a young monster, a child who had never been a child, a creature who might live to take the outward form of a man, but who, within, would live

and perish a mere beast. (337)⁹⁾

これは6歳前後と思われる幼児がHMの主人公であるレドロー(Redlaw)の部屋に突然躍り込んで来て隅に小さくうずくまる初めて登場する場面において、その姿が描出されている箇所であるが、姿形は幼児のそれを備えているとはいえ、およそ似て非なる醜悪でおぞましい怪物か野獣以外の何物でもない存在物である。名前と住所を問うレドローに対しそんなものはないし、何も知らないと答えるこの幼児が年齢こそ幼く設定されているけれども、上記の12歳当時の境遇をチンピラ泥棒や浮浪児と一体化させているディケンズの心象風景が投影された創造である¹⁰⁾ことは指摘するまでもなく明らかである。ということは、作家の内面の深奥に幽閉され封印されていた12歳当時の記憶が凝集されて創り出された人間像がこの獣同然の孤児なのであり、その意味において、少年ディケンズの分身であることはいうまでもない。

幼児と鉢合わせをすることとなったレドローの姿は次のようである。

As he stood rooted to the spot, possessed by fear and wonder, and imagining he heard repeated in melancholy echoes, dying away fainter and fainter, the words, 'Destroy its like in all whom you approach!' a shrill cry reached his ears. It came, not from the passage beyond the door, but from another part of the old building, and sounded like the cry of some one in the dark who had lost the way.

He looked confusedly upon his hands and limbs, as if to be assured of his identity, and then shouted in reply, loudly and wildly; for there was a strangeness and terror upon him, as if he too were lost. (336)

暗闇の中で迷ってしまっただけで不安の叫びを発している幼児に鋭く反応して狂的な叫びを発するレドローに認められるのは、アイデンティティを喪失し拠り所を見失ってしまったおのが姿に異様な戦慄を覚えて立ちすくむ人間の姿である。これが幼児とレドローとが同根の状況下にあるという事実の表れであることは申すまでもない。

... he saw with horror that, in spite of the vast intellectual distance between them, and their being unlike each other in all physical respects, the expression on the boy's face was the expression on his own. (364)

年齢の差もさることながら知性面での隔絶が存するにもかかわらず、獣性むき出しの浮浪児とレドローとはまさに同工の軌跡を描く双子のごとき関係にあるというのである。

全てはレドローが辛く苦しい記憶の忘却を希求したことに端を発したことであった。こ

の初老のエリザベス朝時代から続く古い学校で教鞭をとっている高名な化学者にして勝れた教育者でもある人物が内に抱え込んでいる記憶は、苦難と悲哀に満ちたものであった。出自からしてそうとしか表現の仕様がなない感じである。

‘ No mother's self-denying love, ’ pursued the Phantom, ‘ no father's counsel, aided *me*.

A stranger came into my father's place when I was but a child, and I was easily an alien from my mother's heart. My parents, at the best, were of that sort whose care soon ends, and whose duty is soon done; who cast their offspring loose, early, as birds do theirs; and, if they do well, claim the merit; and, if ill, the pity. ’ (332)

実母と継父に幼児期から疎んじられ、レドローが順調に行った時はその手柄を横取りするとともに失敗した時は周囲の同情を求めるといふ振る舞いを重ねるだけの、我欲だけが機能している親子とは名ばかりの家庭に出自を得たというのである。ここに自分を靴墨工場に働きに出した上に娑婆に置き去りにして殆ど顧みることのなかった両親への怒りと許し難いというディケンズの心情の投影を、まざまざと感受できることはもう述べるまでもない。

こうした両親と縁を切る形でレドローの苦闘が展開されることになる。一人の親友を得て共同で勉学を続ける彼を支える存在が居た。レドローの妹である。彼女は癒しと慰めを与えてくれたという。

‘ Such glimpses of the light of home as I had ever known, had streamed from her. How young she was, how fair, how loving! I took her to the first poor roof that I was master of, and made it rich. She came into the darkness of my life, and made it bright. She is before me! ’ (ibid.)

生まれて初めて持った住処を妹が明るく豊かな雰囲気にも包まれた家庭にしてくれたと、レドローは亡妹への讃美と感謝の想いを表白している。ところが、妹の恋心を獲得していた親友がレドローの愛する女性と駆け落ちをするという事件が出来て、兄妹ともども裏切られ捨てられるという苦い軌跡を描くこととなる。従前にも増して二人だけの肩を寄せ合う生活を続ける中で、勉学と苦闘を繰り広げる兄を妹は献身的に支えてくれたという。

‘ My sister, doubly dear, doubly devoted, doubly cheerful in my home, lived on to see me famous, and my old ambition so rewarded when its spring was broken, and then ’

‘ Then died, ’ he interposed. ‘ Died, gentle as ever, happy, and with no concern but for her brother. ’ (333)

長年の研鑽が実って学者として成功した兄の姿をしっかりと見届けてから、彼女は永眠の旅路に就いたと説明されている。両親にも親友にも恋人にも疎外され裏切られることの連続だったレドローの暗澹たる人生を一筋の光明のごとく静かに優しく照らし続けて、自己犠牲的に支えて成功へと導くことに大きな役割を果たしたのが妹の存在ということになり、まさに妹が居たからこそレドローの化学者としての栄達も成就し得た訳である。こうした妹の存在という話しになると、HM が発表される直前の 9 月 2 日に他界したディケンズの姉ファニー(Fanny [Frances] Dickens, 1810-48)がクローズアップされてくることになる。前年の秋頃から結核で臥せていたファニーは遂に力つき、37 年の短い生涯を閉じたのである(ヘンリー・バーネット夫人[Mrs. Henry Burnett]としてではあるが)。彼女の葬式の日ディケンズと終日行動を共にしたフォースターは次のように認めている。

... on the day of her funeral, which we passed together, I had most affecting proof of his tender and grateful memory of her in these childish days¹¹⁾.

姉との子供時代の思い出を語るディケンズにはこの上ない情愛と感謝が溢れていたというのである。こうした心的態度がレドローを私心なく支え続けた妹として凝集されていることは明白であるが、ファニーとディケンズをめぐる関係はそう単純なものばかりでもなかったように思われる。

両親と弟妹達が負債者監獄に収容され、ディケンズが靴墨工場へ働きに出されていた間も彼女は王立音楽院で学びながらその寮で生活する¹²⁾という別世界にいたのであった。音楽院の奨学金を獲得したこともあり、両親としてはなけなしの金をはたいてでもこの将来有望と思われた娘に勉学を続けさせたのであるけれども、弟ディケンズとの境遇の落差は文字通り天と地ほどの隔たりがあった。上掲の自伝的手記中にそれが端的に見てとれる場面が現出する。マーシャルシー監獄を出た家族にディケンズが合流した頃の出来事で、家族の何人かとテナデン・ストリートにある王立音楽院に出かけたディケンズの眼前で、ファニーに何かの賞が授与される場面が繰り広げられた。

I could not bear to think of myself beyond the reach of all such honourable emulation and success. The tears ran down my face. I felt as if my heart were rent. I prayed, when I went to bed that night, to be lifted out of the humiliation and neglect in which I was. I never had suffered so much before. There was no envy in this¹³⁾.

フォースターから質問を受けた 1847 年 3 月から 4 月にかけての時期からさほど経過していない時点で自伝的手記を認めたディケンズは、当然のことながら姉ファニーが治癒不能

の結核に冒されている事実¹⁴⁾を知っていた。それが影響を与えたのであろうか、放置されているだけの惨めなおのが境遇に涙するかたわら、姉への嫉妬は覚えなかったとディケンズは書き留めている。賞讃を浴びている晴れがましい姉ファニーの姿と比べようもない程見すばらしくいじけた自己の姿への断腸の想いと屈辱感に襲われている内面状況に、一片の羨望の念も抱懐していなかったというのはどうにも額面通りには受け取れない。話しを繕い美化しているという印象が残るのは否定できそうもない。ファニーが肉親の中で唯一親和を感受できる存在である事実を考慮に入れても。だから、額面通りに受け取るとすれば、結局は不治の病に倒れた姉への惻隱の情がディケンズの筆致に影響を及ぼして、鬱屈した情念が軟化し溶解した心的姿勢で記述がなされ、ファニーと共におのが心情も美化した表白が流露することとなった、としか考えようがないのである。自伝的手記を引き継ぐ形で発表された *HM* ではその死の直後ということもあって、兄レドローを献身的に支え癒し続けて他界する妹という存在がファニーへのオマージュであり、更にレクイエムとしての意味を持っていることも当然見落としてならないことである。子供に無関心で幼児から一顧だにしない態度をとりながら、欲得ずくで動くことだけは忘れない実母と継父という両親の設定に込められたディケンズの父ジョンと母エリザベスへの憎念と怨念の激しさは指摘するまでもない。それと反比例するかのようになり、全てにおいて裏切られ見捨てられた挙げ句の果てに、レドローと妹とが兄妹というより夫婦とも思える関係で家庭を作り、お互いが唯一の信頼できる相手として支え合いながら精一杯人生行路を歩んでいる軌跡は、異常で倒錯的な傾きが認められることは避けられないが、孤愁に深く覆われたものであることもまざまざと感受される。兄に先立って若くして世を去る妹はファニーだけでなく、妻キャサリンの妹であり、姉の新婚家庭に同居している内に義兄の気持ちを姉以上に傾注させた存在として、そして 1837 年 5 月 7 日に僅か 17 歳の若さで絶命してディケンズに終生払拭すること不能な慟哭と衝撃を遺した存在として有名なメアリー・ホガース(Mary Hogarth, 1819-37)が影を落としているように思われてならない。孤独な苦闘を繰り広げるレドローを包み込み押し潰さんとする雰囲気には、そうとでも解釈しないと得心がいかない程の暗さと重苦しさが看取されるということである。妻と 7 人の子供に恵まれた家庭もディケンズのかような孤立感を前にすると、殆ど無力であったのか。という事になると、ディケンズの内面世界においては無力の現在を凌駕する過去とその記憶が圧倒的な支配権を確立し続けていたことは論を俟たない。

妹を亡くした後のレドローは傑出した化学者であり、学生の尊敬を集める勝れた教育者でもあるという名声とは裏腹に、過去とその記憶に憑かれた閉鎖的で寄る辺なき歩みを続けている初老の男である。祝祭であり親和と慈愛のシーズンであるクリスマスが巡ってくる毎に、普段にも増して悲哀と苦悶と怨念に満ちた過去が意識の全面を占有して彼を圧倒することが反復されるばかりであった。

‘ Another Christmas come, another year gone! ’ murmured the Chemist, with a gloomy sigh. ‘ More figures in the lengthening sum of recollection that we work and work at to our torment, till Death idly jumbles all together, and rubs all out. ’ (324)

クリスマスは苦しみの記憶を募らせて生の軌跡を息苦しいものにするだけの作用を行うシーズンだと、レドローはクリスマスに対する呪詛を吐露している。そうした陰鬱なもの想いに沈んだ彼の内面と照応するかのごとく、反クリスマスの空間が現出する。

As he fell a-musing in his chair alone, the healthy holly withered on the wall, and dropped dead branches. (330)

クリスマス恒例の行事である柵の飾り付けを管理人であるウィリアム・スウィジャー (William Swidger) とその妻ミリー (Milly) と前者の父親フィリップ (Philip) が終えて立ち去ると、その柵の枝が死に絶えて落下してしまい、まさに反クリスマスのとしか形容の仕様のない死の世界が現出する。と同時に、レドローの分身たる亡霊が出現したのである。

Ghastly and cold, colourless in its leaden face and hands, but with his features, and his bright eyes, and his grizzled hair, and dressed in the gloomy shadow of his dress, it came into his terrible appearance of existence, motionless, without a sound. (330-31)

そして、レドローとその似姿をたたえている亡霊との間で、クリスマス・イヴの夜、学校の古い建物の奥まった所にある死の世界に変容したレドローの私室において、息詰まる対峙が展開される。

The living man, and the animated image of himself dead, might so have looked, the one upon the other. An awful survey, in a lonely and remote part of an empty old pile of building, on a winter night, with the loud wind going by upon its journey of mystery whence, or whither, no man knowing since the world began and the stars, in unimaginable millions, glittering through it, from eternal space, where the world's bulk is as a grain, and its hoary age is

infancy. (331)

風が吹き荒れ満天の星が宇宙の彼方から輝きを放つ悠久の大自然の営みの中で、生身の人間と死の幻影たる分身との凍り付くような睨み合いが繰り広げられる。だが、死の世界が現出した時点で優劣が決まっていたことは指摘するまでもなく、既述したごとく苦しみと悲哀の連続体以外の何物でもない過去を列挙してレドローを嘲罵し煽り立てることを通して、亡霊は遂に辛く悲しい記憶を忘却できるものならそうしたいと彼に言わせることに成功する。しかも学識や研鑽の成果は消えることはないし、愚かで凡庸な人間には到底出来ないことで、お前のような深遠な思想の持ち主にだけ可能なことなのだと、レドローの自尊心を擽ることで言葉巧みに誘導して目的を達成してしまうのである。更に畳みかけるように、「記憶を忘れろという私の提案を受けるかね」とレドローに迫る。

‘ Say, ’ said the Spectre, ‘ is it done? ’

‘ It is! ’

‘ It is. And take this with you, man whom I here renounce! The gift that I have given, you shall give again, go where you will. Without recovering yourself the power that you yielded up, you shall henceforth destroy its like in all whom you approach. Your wisdom has discovered that the memory of sorrow, wrong, and trouble is the lot of all mankind, and that mankind would be the happier, in its other memories, without it. Go! Be its benefactor! ’

(335-36)

亡霊の誘惑に乗ったレドローが記憶を売り渡すこのシーンの迫力は圧巻であり、本篇 *HM* のクライマックスを成すものである。レドローのこの行為が悪魔メフィストフェレス (Mephistopheles) の誘惑に乗って魂を売り渡す契約を結んだファウスト (Faust) の行為にも比肩する行為、つまり魂を売り渡す行為と同義のものであることは指摘するまでもない。「私が授与した賜物を携えて何処へでも行き、全ての人々の悲哀、遺恨や苦痛と結び付く記憶を破壊することで、人類の恩人になれ」という亡霊がレドローに宣告する言葉より、レドローの行為が魂を売り渡してしまったも同然のものである事実を何にも増して明確に認識できよう。だからこそ、先述したようにレドローはアイデンティティを喪失した状態、即ち魂を喪失した状態で暗闇の中で立ちすくみ、野獣のごとき叫び声を発する非人間的存在と化してしまったのである。拾い上げてくれた上に食事も与えてくれるなど暖かい配慮を示すミリーの所に帰りたがる幼児を送り出した後のレドローの姿は何とも印象的である。

He nodded, and the naked feet had sprung away. He came back with his lamp, locked his door

hastily, and sat down in his chair, covering his face like one who was frightened at himself.

For now he was, indeed, alone. Alone, alone. (338)

自ら望み選択した道であるとはいえ、その帰結に恐れおののき打ち拉がれているレドローの姿から浮き彫りにされるのは、記憶という人間としての核を成すものを売り渡して抜け殻と化した生ける屍同然の醜悪な様相のみである。但し、自己の所業の罪深さに恐れ戦いている姿からは一抹の救いが感じとれはするけれども。

ここで“ The Gift Bestowed ”と題された第一章から“ The Gift Diffused ”なる題名を持つ第二章へと本篇は移って行く。タイトルが示すように亡霊から授与された贈り物、つまり悲哀、遺恨、苦痛と結び付く人類の記憶を消去せよという使命をレドローは実行に移して行くというのが本章の主筋であるが、ディケンズはこの部分の執筆に相当に苦労し神経が参ったようである¹⁵⁾。亡霊から授かった力が他人に伝染して行く回路をレドロー自身は無論承知している訳でも関与できるものでもなく、ケースバイケースで微妙な差異を付けて描き出そうと意図した¹⁶⁾のだから、それ相応の労苦と疲労が付随して引き起こされたのは当然の事象といわざるを得ない。ここまで周到な配慮が行き届いているということが、ディケンズが *HM* を執筆するにあたり入念な計画を立てて書き進めている¹⁷⁾事実の証左となることは論を俟たない。テタビー夫人(Mrs. Sophia Tetterby)は通りで一瞬目が合っただけでレドローに侵され、彼女の家の二階に間借りをしているデナム(Edmund Denham)と名乗る学生(実はレドローと妹を裏切って捨てた親友と恋人との間にできた子供)の場合は、凝視を受け腕を直接つかまれることでレドローからの伝染を受けることになる。フィリップ・スウィジャーの息子でありウィリアムの兄にあたるジョージ・スウィジャー(George Swidger)のベッドに腰を下ろして相手の眼差しを受けるのを避けようとしながらも、結局はこの瀕死の病人を魔力で残忍で冷然たる人非人へと変貌させるシーン(370-71)は、父親と弟を同工の状態へ感染させた事実を含めて、レドローの人類の恩人としての存在価値の背徳性と罪障の救われようのない深さをいやが上にも看取させるものである。

クリスマス・シーズンが巡ってきても帰省できずに病床にある学生デナムの見舞いに向いてきた筈であるのに、その相手が人間性を喪失した狂的状态に陥ってしまった現場から飛び出して通りを彷徨するレドローより、記憶の忘却とともに核を亡くして無明の闇に覆い尽くされるだけの内面世界を抱え込んでいる姿が炙り出されてくるといってよい。

whither he went, he neither knew nor cared, so that he avoided company. The change he felt within him made the busy streets a desert, and himself a desert, and the multitude around

him, in their manifold endurances and ways of life, a mighty waste of sand, which the winds tossed into unintelligible heaps and made a ruinous confusion of. Those traces in his breast which the Phantom had told him would ' die out soon, ' were not, as yet, so far upon their way to death, but that he understood enough of what he was, and what he made of others, to desire to be alone. (361)

内なる心象風景も外部領域も全て砂漠と化した世界を彷徨しながら、犯した所業の罪障のいい知れぬ重さに苛まれて墮地獄の苦悶に喘いでいる人間がここに描き出されている。おのが魔力の持つ恐るべき感染力に慄然とし立ちすくむレドローは、この後唯一人魔力を受け付けられない例の幼児を同伴者として私室に自らを幽閉する。ドアを叩きながら救援の助力を懇願するミリーが必死の叫び声を挙げているにもかかわらず。何故なら、彼女はその魂を少しでも感染させることを、他の誰よりもレドローが恐れていた人間であったからである。そして、悔悟の悲鳴を亡霊に向かって発する。

' Shadow of myself! Spirit of my darker hours! ' cried Redlaw, in distraction. ' Come back, and haunt me day and night, but take this gift away! Or, if it must still rest with me, deprive me of the dreadful power of giving it to others. Undo what I have done. Leave me benighted, but restore the day to those whom I have cursed. As I have spared this woman from the first, and as I never will go forth again, but will die here, with no hand to tend me, save this creature's who is proof against me, hear me! ' (374)

記憶をまるで持たない獣のごとき幼児を反面教師として、おのが行為の倨傲と醜悪さを思い知らされたレドローのこの懺悔の叫びが亡霊に届き、ミリーの導きにより再生の歩みを繰り広げる展開を迎えることはもう指摘するまでもない。“ The Gift Reversed ” と題される第三章の冒頭において、重苦しい一夜が明けんとする朝まだき、悔恨の姿勢を続け、涙で溢れた目に両手を当てて頭を垂れているレドローの前に、床で眠りこけている幼児を挟む形で亡霊が出現する。

Beyond the boy, so that his sleeping figure lay at its feet, the Phantom stood, immovable and silent, with its eyes upon him.

Ghastly as it was, as it had ever been, but not so cruel and relentless in its aspect or he thought or hoped so, as he looked upon it, trembling. It was not alone, but in its shadowy hand it held another hand.

And whose was that? Was the form that stood beside it indeed Milly's, or but her shade and

picture? The quiet head was bent a little, as her manner was, and her eyes were looking down, as if in pity, on the sleeping child. A radiant light fell on her face, but did not touch the Phantom; for, though close beside her, it was dark and colourless as ever. (376)

亡霊が再登場するこのシーンの持つ意義については説明するまでもあるまい。レドローを記憶の忘却へと誘惑しその契約を交わすことを鮮やかに成し遂げた場面における恐ろしさは変わらず看取されるものの、その相貌からは残忍さと無慈悲さが無くなった姿で、亡霊は再登場してきたのである。しかも手を亡霊に引かれたミリーの影像が傍らに立ち、彼女の顔に燦然と輝く光が当たっているというのである。ここの亡霊が亡霊というよりは精霊に変容して再登場していることと、それに手を握られ顔に光を受けて登場してきたミリーの影像がレドローの再生と復活を導く救いの天使、否イエス・キリストにも比すべき役割を、ミリーが果たすことを予告していることは明白であろう。時はクリスマスの夜明け。まさにクリスマスらしい奇跡の顕現が成就されることになるといえば確かにそうだが、精霊に変容した分だけ亡霊が以前の不気味さと迫真性が完全に欠落した希薄な存在物へと転質してしまっていることは否定できない。レドローの魂を善導して行くミリーの間像も個性豊かで精彩を放つ存在へと昇華しているとは到底受け取れず、最終章であるこの第三章で「弱点と衰退」¹⁸⁾が露呈される軌跡を描いて、HM は終結部を迎えることとあいなるのである。

ミリーの治癒力によりレドローに感染されて狂乱状態を呈していた全ての人々が平常に戻り、例の幼児もレドローが引き取って養育することとなるという風で大団円を迎える運びとなる本篇 HM の最終場面は、全員が学校の大食堂に集まってレドロー主催により開催されるクリスマスの晩餐会である。

... there was one thing in the Hall; to which the eyes of Redlaw, and of Milly and her husband, and of the old man, and of the student, and his bride that was to be, were often turned, which the shadows did not obscure or change. Deepened in its gravity by the firelight, and gazing from the darkness of the panelled wall like life, the sedate face in the portrait, with the beard and ruff, looked down at them from under its verdant wreath of holly, as they looked up at it; and, clear and plain below, as if a voice had uttered them, were the words ' Lord, keep my memory green. ' (398)

大食堂の壁に掛かる学校の創立者の一人の、まるで生きた人間の顔のように肖像画の中からじっと見つめている顎ひげを生やし襷襟を付けた穏やかな顔と、その下に巻物型装飾で

彫り込まれている「主よ、わが記憶を緑ならしめんことを」という暖炉の火を受けて浮かび上がっている古い文字とを、晩餐会に集まっているレドロー以下の面々がしばしば見上げている、という叙述で本篇は終幕を迎える。つまり、亡霊との体験を経たレドローが創立者の肖像画とそれに彫り込まれた文字とに安らぎを求めようとしている姿勢¹⁹⁾は当然のことであり、そうすることで肖像画もレドローが静穏な状態を保持し続けることを確かなものにしてくれるという親和と平安を醸し出しながら、*The Haunted Man* は収束するのである。それがいかにも弱々しく、所詮はクリスマス一夜の幻影に過ぎないという印象が付きまとうことは避けられないとしても。

[]

創立者の肖像画に彫り込んである“ Lord, keep my memory green. ”という祈りの言葉をめぐって、フィリップ・スウィジャーは次のような回顧談を行う。

‘ One Christmas morning, ’ pursued the old man, ‘ that you come here with her and it began to snow, and my wife invited the young lady to walk in, and sit by the fire that is always a-burning on Christmas Day in what used to be, before our ten poor gentlemen commuted, our great Dinner Hall. I was there, and I recollect, as I was stirring up the blaze for the young lady to warm her pretty feet by, she read the scroll out loud, that is underneath that picter. “ Lord, keep my memory green! ” She and my poor wife fell a-talking about it; and it’s a strange thing to think of, now, that they both said (both being so unlike to die) that it was a good prayer, and that it was one they would put up very earnestly, if they were called away young, with reference to those who were dearest to them. “ My brother, ” says the young lady “ My husband, ” says my poor wife. “ Lord, keep his memory of me green, and do not let me be forgotten! ” ’ (390-91)

この回顧談のポイントがレドローの妹とフィリップ・スウィジャーの妻との最愛の人間の記憶の中でおのが記憶が「緑ならしめんことを」と熱い祈りを捧げている姿勢にあることは論を俟たない。その意味において、記憶の忘却を実行に移したレドローの所業が徹頭徹尾許されざるものであることは述べるまでもない。何故なら、悲哀、遺恨と苦痛に根差す彼の記憶の全てが妹をめぐる記憶と密接に関わり合っていて、記憶を忘却することは何よりも大切にしなければならぬ妹という存在とその思い出を抹殺してしまうことに他なら

ないからである。そして、妹につながるものを記憶から払拭することは内面世界の中核を形成している部分の喪失、つまり魂の喪失を意味していて、野獣のごとき幼児と何ら変わるところのない非人間に墮してしまっただけの存在物以外の何物でもないからである。それはフィリップの話しを聞いた後のレドローの吐露より感得できよう。

‘ Philip! ’ said Redlaw, laying his hand upon his arm, ‘ I am a stricken man, on whom the hand of Providence has fallen heavily, although deservedly. You speak to me, my friend, of what I cannot follow; my memory is gone. ’

‘ Merciful Power! ’ cried the old man.

‘ I have lost my memory of sorrow, wrong, and trouble, ’ said the Chemist, ‘ and with that I have lost all man would remember! ’ (391)

知識と教養は残存するとしても忘却し喪失したら人間とは呼べない程の重要性を持つ記憶の真価を、レドローは喪失後の地獄をさすらうがごときおのが体験とフィリップ・スウィジャーの指摘とにより改めて痛切に自覚し認識し得たのであり、今更ながら自己の所業の取り返しのつかない罪障の深さを思い知らされたのであった。両親をめぐる記憶の滅却は望んで当然であるとしても、苦痛、悲哀と遺恨に満ちた過去とその記憶の消滅を希求しそれが実現した瞬間、生存中は無論のこと死後も記憶の中で兄を支え励ましてきた妹というかけがえのない存在を抹殺してしまったのであるから。それもクリスマス・イヴの夜に。人類の罪を進んで引き受けて磔刑に処せられたイエス・キリスト降誕の日とされるクリスマスを迎えてのレドローの振る舞いは、クリスマスであるが為に内面世界に湧出し溢れる一方の過去とそれをめぐる記憶から逃れたいという心的姿勢自体は不可避の事象ではあるけれど、まさに背徳的所業以外の何物でもない。それ故、生ける屍として無明の闇を彷徨しながら授与された苦痛や遺恨に絡む記憶を抜くという使命を果たすことで地獄図絵を現出させ、その分ますます墮地獄の苦悶に喘ぐという報いを受ける羽目に陥ってしまったのである。終局的にはミリーの導きにより平衡状態を回復するけれども、本篇のテーマである「良い記憶に悪い記憶が分かち難く結び付いているからこそ記憶なのである」²⁰⁾という記憶の持つ重要性を“ Lord, keep my memory green! ”に託された「私という存在とその記憶が何時までも兄の中で遣りますように」という妹のメッセージを知ることで、レドローが復活への第一歩を踏み出し得たことは明らかである。それ程にレドローにとって妹をめぐる記憶は魂そのものと等価の重さを持っていたのである。

これは作者ディケンズ自身と姉ファニーをめぐる記憶との関係においても指摘できるこ

とである。HM 執筆の時点においては直前に他界したファニーへの想念が、複雑に屈折した情念の陰りと義妹メアリー・ホガースをめぐる記憶とを上回る形で凝集され形象化されていると見てよい。苦痛、遺恨と悲哀に満ちた幼少時の記憶の中で両親に関する部分だけを抹殺することが可能ならば当然指向したであろうが、それは所詮夢物語に過ぎず、結局ディケンズとしては姉という存在とその記憶を「緑なる」状態で持続していく為には記憶全体を保持していくしか手段がなかったのである。その重苦しさに喘ぎ忘却を願望する姿勢に傾斜することはあったとしても。そうした姿勢の表白を HM 全篇より見てとることができよう。と同時に本篇が執筆された 1848 年の時点においては、負というか暗の記憶からの「重圧をうけとめて何とか内面の均衡を保持させながら生き抜いていくだけのエネルギーがディケンズの内に存在し得ていた」²¹⁾ということも、あわせ指摘できるものと思われるのである。この後のディケンズの生の軌跡をフォローすることは本稿の域を超えはいるけれども。

[注]

1)John Forster, *The Life of Charles Dickens* (London: J. M. Dent & Son, 1966), Vol. 1, p. 19.

2)Forster, p. 20.

3)Forster, p. 21.

4)松村昌家編『ディケンズ小事典』(研究社, 1994), 5 頁。

5)Forster, p. 32.

6)Forster, p. 26.

7)Forster, p. 25.

8)以下 HM と略す。

9)作品からの引用は本文、頁数とも The New Oxford Illustrated Dickens の *Christmas Books* (London: Oxford University Press, 1966)による。

10)Harry Stone, *Dickens and the Invisible World Fairy Tales, Fantasy, and Novel-Making* (London: Macmillan, 1979), p. 135.

11)Forster, p. 31.

12)ファニーが王立音楽院に在籍したのは 1823 年 4 月 9 日から 1827 年の夏までの 4 年間である。

13)Forster, p. 31.

14)当時パリに滞在していたディケンズが父親からの手紙でファニーが結核に冒されている事実を知ったのは 1846 年 11 月のことである(Norman Page, *A Dickens Chronology* [Houndmills: Macmillan, 1988], p. 54)。

15)1848 年 10 月 15 日付の Clarkson Stanfield 宛の書簡中に “ I am working all day at my second part, which bothers me rather. ” という一節が認められている(*The Letters of Charles Dickens*, vol. 5 1847-1849, eds. Graham Storey and K. J. Fielding [Oxford: Clarendon Press, 1981], p. 441)。

16)1848 年 11 月 21 日付の Forster 宛の書簡で、ディケンズは *HM* の第 2 章におけるレドローから他人に伝染していく回路をそれぞれの場合に応じて描き分けたい旨説明している(*The Letters of Charles Dickens*, vol. 5, p. 443)。

17) “ ... Dickens had *The Haunted Man* well planned from the start. ” (Ruth Glancy, “ Dickens at Work on *The Haunted Man* ” in *Dickens Studies Annual*, vol. 15, eds. Michael Timko, et al. [New York: AMS Press, 1986], p. 83).

18) “ *The Haunted Man* ... fails and fades, especially in “ The Gift Reversed. ” ” (Harry Stone, p. 141).

19) Wendy K. Carse, “ Domestic Transformation in Dickens' “ The Haunted Man ” ” in *Dickens Studies Annual*, vol. 23, 1994, p. 177.

20) “ Of course my point is that bad and good are inextricably linked in remembrance, and that you could not choose the enjoyment of recollecting only the good. ” と 1848 年 11 月 22 日付の上掲の Forster 宛の書簡の中で、ディケンズは *HM* のテーマについて述べている(*The Letters of Charles Dickens*, vol. 5, p. 443)。

21)拙論「 Charles Dickens: *Mrs. Lirriper's Legacy* 1864 年のクリスマス作品 」(福岡教育大学紀要, 第 52 号, 第 1 分冊, 2003), 37 頁。

(『安田女子大学大学院開設十周年記念論文集』(平成 15 年 12 月 31 日発行)所収)